

Naoyuki Matsuno 松野直行

日本とクロアチアにおける医療通訳と専門日本語教育としての可能性検討

Pregledni rad

Review article

UDK 811.521-057.68><81'255:61>(497.5)

<https://doi.org/10.32728/tab.16.2019.5>

要旨

日本をはじめ中国、韓国等の東アジアからの観光客が増加しているクロアチアにおいて、観光客とのコミュニケーションの課題が浮かび上がってきている。その中でも対応が遅れている分野の一つとして医療通訳があげられる。日本語ガイドの数自体が少ないクロアチアにおいては、医療通訳はピークシーズンには課題になっていると考えられる。この問題は日本では表面化しており対応が始まっている。そこで日本における厚生労働省をはじめとした複数の調査結果を参考にして、現状並びに医療通訳の必要性及び必要スキルを確認し、クロアチアの日本語教育での応用を考察した。その結果、多くの医療機関が医療通訳の必要性を認識しており、各種施策に加え医療通訳の育成を目指したカリキュラム基準や教育コースも整備され始めている。プーラ大学の日本語学科の学生も将来の職業として、翻訳・通訳者をあげ、日本での就業を希望しており、専門日本語教育の卒業後の進路の一つとしての医療通訳者の可能性が確認できた。

キーワード: 観光、異文化コミュニケーション、通訳、メディカルツーリズム、教育管理、日本語

1. 現在のプーラ大学日本語教育の特色

2015年開設のプーラ大学日本語・文化学科では、日本語を中心としながら、クロアチアの主要産業である観光を意識した観光日本語を専門日本語の一つとして1年時より実施している。2019年現在、在学生は90名を超えている。観光業は学生にとっても非常に身近で、夏季のアルバイトや、実家における民泊、アパートマン経営の例も見受けられる。観光学は専門高校や大学でも設置されているコースであるが、その教育内容はEUのレポートによると業界のニーズと一致していない等の指摘も見受けられる。その一例として、年間1千万人を超える観光客が訪れ、GDPの18%を占める観光業を主要産業とするクロアチアにおいて、15万人の日本人観光客に対し日本語対応ができる公式ラ

イセンス保有ガイドは10名程度であるという人材不足が挙げられる。クロアチアにおいてはライセンスを保有しない者がガイドをすることはできないため、需要に対応できていない面もある。このような状況において特に必要性が高いものの一つに医療通訳があげられる。旅行中の疾病は通常緊急対応となり、通訳が手配できない場合も多く、旅行者は自ら病院に行き、症状を説明、対処しなければならず、また旅程の変更も余儀なくされる。患者と医師のコミュニケーションを考える場合、患者の主訴、病歴については多言語対応の問診票等での対応が可能であるが、治療、処方に対する患者の理解・同意を得ることは難しい。本論では、観光日本語に関連する科目の一つとして「専門日本語としての医療日本語」導入を検討する。

2. 学習者の現状 (アンケート結果から) 学習者の将来の希望

入学時点では、学生自身は具体的な就業の分野を入学時点では想定できていないが、プーラ大学の学生の入学時の将来の希望調査では、翻訳通訳者が27%と最も多く、日本での就業意欲も高い。プーラ大学としては、クロアチア及び日本人観光客に対するニーズを考慮しつつ、ある程度分野を想定する必要があると考えている。観光は翻訳・通訳者に次ぐ希望が多い職種となっており、観光日本語の応用として医療通訳を想定した医療日本語を一つの分野として検討することとした。

クロアチアにおける日本語ガイド、医療通訳の実情は先に述べたが、クロアチア国内のニーズのみならず学生が就業先として希望している日本に目を向けてみても東京都が実施する医療機関の多言語化支援事業にみられるように、通訳者の養成は喫緊の課題として認識されており学生の希望に沿った将来の活躍の場は広がりつつあると考えられる。また、観光日本語を修学したうえでの展開として、日本の医療関係者が期待している、メディカルツーリズムやMICEの誘致への展開も可能となり、観光を主要産業とするクロアチア国内の就業分野としても十分検討に値すると考えられる。

3. 改革の必要性

プーラ大学では2018年現在、学部カリキュラムでは3年間の日本語教育が行われており、日本語能力の到達目標をCEFR /B2 (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment: A1~C2までの6段階のレベル設定) としている。現在国内には日本語に関連する修士課程はなく、B2終了後C1~C2のレベルまで継続して学習したい学生は、卒業後は国外に出ざるを得ない。日本への留学も考えられるが、資金面を含めハードルは高く、各種サポートを受けることができても限られた人数になる。また観光業での就業も想定されるが、このレベルで対応できる分野はかなり限られる。しかしながら、卒業後2年間の修士課程を経て、CEFR/C1~C2レベルになればその可能性は広がる。例えば日本で実施されている専門医療通訳コースの推奨語学レベルがB2に設定されてい

1 「Meeting (会議・研修・セミナー)、Incentive tour (報奨・招待旅行)、Convention または Conference (大会・学会・国際会議)、Exhibition (展示会) の頭文字をとった造語」

ることも考慮すると、一般的な日本語レベルは基準を満たすが、必要とされるCレベルの専門用語は未習である。この対策として、クロアチアで修士課程内容を修了した後、日本の事情あるいは言語的知識を習得することが考えられる。プーラ大学では学部看護学科も設置されており、日本語学科の学生だけでなく、看護知識を持った学生の育成も可能になると考えられる。平成27年度「医療の国際展開に関する現状調査」一般社団法人日本病院会によると、日本でアジア言語や英語での医療通訳は行われているが欧州言語による通訳は限られていることがわかる。プーラ大学の学生は英語に加え、イタリア語やドイツ語等の第2外国語を習得している学生も多く、欧州言語に加え日本語、観光、医療の知識を兼ね備えた学生を育てることにより、EU、クロアチア、日本の観光業の発展に貢献できると考えている。

4. 日本とクロアチアにおける専門日本語としての将来性

4.1 クロアチアにおける観光日本語を活かした専門性のある職業

プーラ大学で現在実施している観光日本語も、3年間の目標としてCEFR/B2となっているが、このレベルで対応できる具体的な観光現場をみると、ホテルのレセプションやレストランとなる。また、B2レベルで日本語ガイドをする場合は評価が低くなることが予想される。

しかし、日本語能力を修士課程でC1レベル以上に伸ばすことができればその活躍の場は広がることになるだろう。観光日本語学習の延長として想定される専門分野としては、ウェブページの翻訳、医療通訳や国際会議通訳、またメディカルツーリズムのガイドや、旅行会社におけるツアーの企画等のマネジメント分野が挙げられる。また独立した日本語ガイドとして対応できる分野としては、病院での通訳、盗難や事故にあった場合の警察での通訳、クロアチアのワインやオリーブ等の主要農産品を中心とした小規模輸出入のビジネスのコーディネーター等が考えられる。

想定されるシラバスの骨格としては、日本における医療通訳共通基準を参考にすると、大項目では、知識と技術に分けられる。知識においては、異文化理解、医療に関する知識、組織や制度に関する知識などが含まれる。技術としては、語学力、通訳技術、実践的技術、コミュニケーションスキルなどが下位カテゴリーとなっており、同等の内容を修士課程においてカリキュラムに組むことは十分可能であると考えられる。また、厚生労働省の医療通訳育成カリキュラム基準も、通訳理論と技術、倫理とコミュニケーション、医療通訳に必要な知識となっており、詳細もほぼ一致している。

4.2 クロアチアにおける日本語による医療通訳教育への適応の可能性

ここでは、先にあげた医療通訳共通基準と医療通訳育成カリキュラム基準のカテゴリーを基本に修士課程での適応可能性について検討する。基本となる医療の基礎知識については、2019年現在プーラ大学に医学部の設置が進められており、看護学科含めダブルメジャーでの履修が可能にな

れば、学部課程で母語での学習が可能になる。その結果修士課程での日本語による通訳教育以前に基礎を履修することにより効率的なカリキュラムを組むことができる。通訳技術、実践的技術、コミュニケーションスキルの習得については、具体的には観光日本語の演習としてのガイド技術の実習プログラムが応用できると考えている。このプログラムは、不足している日本語ガイド養成を目的とし、通訳技術と通訳実技習得を目的としたクロアチアの文化遺産を対象とした遺産通訳者Heritage Interpreter養成のためのものであるが、現地調査やプロガイドからのヒアリングをとおして自ら文化遺産を翻訳・通訳し、最終的には現地ガイドを体験しスキルを習得するもので、対象を医療に置き換えることでMedical Interpreterにできる。中には専門語彙の抽出・翻訳・比較をとおして文化の違いを確認する内容も含まれており、専門分野の異文化理解も対応できる。日本における医療組織や制度、在留資格や制度に関する学習については、集中講義等で対応することが必要と考えられる。

4.3 国際医療交流の可能性

前章の日本の調査結果の中でも特にクロアチアの日本語教育として、現状と将来を考えるうえで参考となるのが、「国際医療交流への対応に関する研究」である。2017年、日本の厚生労働省は全国の医療機関や自治体を対象とし外国人患者受け入れ実態に関する大規模調査を実施した。これによると、約8割の病院が外国人患者受け入れを実施する上で整備すべき要件として、医療通訳の養成を挙げており、喫緊の課題であることを明らかにしている。この調査は訪日観光客の医療ニーズ把握にとどまらず、診療や検査を目的に訪日する外国人への質の高い医療サービス提供、つまりメディカルツーリズムへの展開も考慮している。経済産業省としても「医療技術・サービス拠点化促進事業」をとおして日本の先端医療の国際展開を支援しているため、医療日本語を学ぶ学生のインセンティブになるとともに、観光業を主要産業とするクロアチアにおいても将来が有望な市場と考えられる。また、プーラ大学は、日本人観光客に対する医療通訳、さらに日本で医療通訳士の資格を取得を支援することで、日本での就業も満たすことができるようになる。

5. プーラ大学における実現可能性の検討

プーラ大学の学部構成は、経済観光学部、人文学部、教育学部、学際イタリヤ語・文化学部、情報学部、技術学科、自然科学学科となっている。自然科学科の中には看護コースが含まれている。2020年度秋に開始予定日本語プログラムの修士課程については、クロアチア初の日本語教育機関ということもあり、日本語教師の育成や、日本学・日本文化の研究者の育成とともに、観光を通じた経済貢献という側面に対する考慮も重要と考えている。修士課程の専門性を考えた場合、想定される学生の専門及びその日本語レベルは大きく3つに分類することができる。一つ目は、シングルメジャーで日本語コースを卒業するもので、このタイプは、日本語教師や、日本学研究に

向いていると考えられる。また、その中でも観光に興味がある学生は、医療通訳にも対応できる日本語ガイドとしての活躍はもちろん、観光ビジネスのマネージャーとしての活躍も期待される。二つ目は、ダブルメジャーの学生で、日本語の他に何らかの専門を持っている学生である。歴史の学位を持っているれば、専門性を生かし、クロアチアの世界遺産等を中心とした専門ツアーの企画やガイドが可能になる。上述した2つの想定は、学部卒業時の日本語レベル、つまりCEFR/B1-B2レベル者が該当する。3つ目は日本語以外の専門を持ちながら、選択日本語もしくは独学で日本語を学んできた学生を対象とする。プーラ大学で仮定すると、選択日本語の学生は3年間でCEFR/A2レベルに到達する。基本的には他学部の看護やITの専門知識を持った学生、もしくは観光学を学習した学生が対象になると思われる。

上記をまとめると、修士課程で日本語履修対象者は、①3年間日本語を学びB2レベルに達した学生、②人文学以外の専門分野を学びながら日本語を学習しA2レベルに達した学生が対象ということになる。医療通訳プログラムを考えれば、3年間B2レベルで卒業した学生に対しては、既存日本語テキストをベースに学習することもできる。また、専門として看護学を学習した学部卒業生で、学部課程で選択日本語学習を受けA2レベルをクリアできれば修士課程での日本語学習によりB2レベルまで引き上げることもでき、終了後に医療通訳としての活躍が期待できる。

6. プーラ大学日本語教育の現状から将来の発展的カリキュラム

専門教育と日本語教育の連携については日欧問わず各分野で実施されている。現在プーラ大学で行っている専門日本語である観光日本語は、CEFRに基づいた日本語教育をコアとしながら、CLIL2のような形で職業志向の観光日本語を組み入れる形になっており専門日本語教育の実践経験を重ねてきている。この専門部分を医療に転換した修士課程カリキュラムを開発することにより対応が可能と考えられる。もう一つの可能性はダブルメジャーの学科として、学部初年度より、観光学科、看護学科・情報処理科・海洋学学科を加えることである。以上述べたように、欧州言語に加え日本語、観光、医療の知識を兼ね備えた学生を育てることにより、相互の観光客数の増加や、関連する国際会議の開催等をおとしたビジネス交流の活性化をおしてEU、クロアチア、日本の経済発展に貢献できると考えている。

参考文献

HLAVAČ 2015

Jim Hlavač, "Croatian interpreters and translators: profiles and reported behaviour in professional settings". *Croatian Studies Review*, 11, 2015, 81-107.

ITO 2012

Miho Ito, "Present situation and challenges of medical interpreters in Japan: Results of a questionnaire survey", *Journal of International Health*, 27, 4, 2012, 387-394.

Internet:

多文化共生センターきょうと, 一般財団法人 日本医療教育財団 「医療通訳」 平成30年3月 <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000385181.pdf>

国土交通省観光庁 平成28年度「訪日外国人旅行者の国内における受け入れ環境整備に関するアンケート」結果

<https://www.mlit.go.jp/common/001171594.pdf>

東京都福祉保健局 「外国人旅行者等への医療情報提供に係る調査」平成28年10月 http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryu/iryu_hoken/gaikokujin/tyosakekka.files/tyousakekka.pdf

一般社団法人日本病院会-国際医療推進委員会-「医療の国際展開に関する現状調査」結果報告書 平成27年

https://www.hospital.or.jp/pdf/06_20151028_01.pdf

厚生労働省「国際医療交流(外国人患者の受入れ)への対応に関する研究平成22年度 総括・分担研究報告書 (厚生労働科学研究費補助金厚生労働科学特別研究事業)」2011年

http://www.twmu.ac.jp/Basic/int-trop/_userdata/sympo_h26.pdf

観光庁「MICEの経済波及効果及び市場調査事業報告書」平成28年度 <https://www.mlit.go.jp/common/001182932.pdf>

厚生労働省 「外国人向け多言語説明資料」2018年3月版

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryu/iryu/kokusai/setsumei-ml.html 2018年6月22日. 閲覧

NPO法人国際久留生ハーティ港南台 公益財団法人かながわ国際交流財団 「多言語問診表」 Multilingual medical questionnaire, <http://www.kifjp.org/medical/> 2018年6月22日. 閲覧

特定非営利活動法人 多文化共生センターきょうと 「多言語科目問診システム」 <http://is.tackpad.net/> 2018年6月22日. 閲覧

大阪府健康医療部薬務課「薬局店頭における外国人対応マニュアル」

http://www.pref.osaka.lg.jp/yakumu/yakkyokutorikumif_manual.html 2018年6月22日. 閲覧

多文化共生センターきょうと「専門医療通訳養成コース2017-医療通訳研修I・II」

<https://www.tabunkakyoto.org/2017/06/08/> 2018年6月28日. 閲覧

一般財団法人 日本医療教育財団 「外国人患者受入れ医療機関認証制度」 <http://www.jme.or.jp/jmip/> 2018年6月28日. 閲覧

厚生労働省 医療通訳育成カリキュラム基準 (平成29年9月版)

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/kijun.pdf> 2018年6月28日. 閲覧

東京都福祉保健局 「外国人患者受入れ体制整備支援事業実施要綱」

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryu/iryu_hoken/gaikokujin/taiseiseibi.files/jisshiyoko.pdf 2018年7月2日. 閲覧

一般社団法人 Medical Excellence JAPAN (MEJ) 「医療技術・サービス拠点化促進事業」

<http://www.medical-excellence-japan.org/jp/h29/results.html> 2018年7月2日. 閲覧

International Congress and Convention Association, ICCA Statistics Report Public Abstract 2015

<https://www.iccaworld.org/dcps/doc.cfm?docid=1951> 2018年6月2日. 閲覧

SUMMARY

Medical Interpreters in Tourism in Japan and Croatia

In recent years the number of tourists in Japan has greatly increased, with the result that service sectors have had to improve their methods of accepting tourists. In particular, there is a problem in communication with tourists. One of the fields in which a response is delayed is in the training of medical interpreters. The same problem is also present in Croatia, with few Japanese-speaking guides. This paper examines several surveys on medical interpreters, including the Japanese Ministry of Health, Labor and Welfare. As a result, most medical institutions recognize the necessity of medical interpreters. Furthermore, it has been established that educational courses aimed at nurturing medical interpreters have begun to be developed. Many students at the University of Pula's Japanese Department desire to pursue translation interpreting as a future profession. Results indicate that medical interpreting is a promising field in Japanese language education in Croatia.

Keywords: tourism, intercultural communication, interpreter, medical tourism, education management, Japanese language

SAŽETAK

Medicinski tumač u turizmu Japana i Hrvatske

Posljednjih godina broj turista u Japanu uvelike se povećao. To je natjeralo uslužne sektore na poboljšanje načina prihvaćanja turista. Posebno postoji problem u komunikaciji s turistima. Jedno od područja čiji odgovor kasni je obuka medicinskih tumača. Jednak je problem prisutan i u Hrvatskoj u kojoj postoji samo nekoliko turističkih vodiča koji govore japanski. Provedeno je nekoliko anketa o medicinskim tumačima, uključujući japansko Ministarstvo zdravstva, rada i socijalne skrbi. Kao rezultat toga većina medicinskih ustanova prepoznaje potrebu medicinskih tumača. Također se pokazalo da se polako počinju razvijati obrazovni tečajevi s ciljem obrazovanja medicinskih tumača. Mnogi studenti sa smjera Japanski jezik i kultura na Sveučilištu Jurja Dobrile u Puli voljeli bi u budućnosti biti prevoditelji. Rezultati pokazuju da je medicinsko tumačenje obećavajuće polje u obrazovanju japanskoga jezika u Hrvatskoj.

Ključne riječi: turizam, interkulturalna komunikacija, tumač, medicinski turizam, upravljanje obrazovnim sadržajem, japanski jezik